

平成二十四年度第三十九回山形県高校演劇合同発表会 上演一
山形西高等学校演劇部 上演台本

題 『きょうだい』 作、佐藤俊一

時 現代、季節は夏
所 某高校の取り壊される予定の旧図書館
登場人物 彩花（高校二年生）
沙織（高校二年生、彩花の同級生）
緑（高校二年生、彩花の同級生）
加奈子（彩花の姉、二十代）
彩花の母（四十代）
智子（高校二年生、沙織のバンド仲間）
大沼（学校司書、三十代）
ダイサービス施設職員、沙織のバンド仲間 1
沙織のバンド仲間 2

第1場

夏 夏期講習の午後 某高校の旧図書館（古い建物で、取り壊し間近）

S E 蝉の声、遠くに聞こえる。緞帳上がる。

沙織、がらんとした旧図書館の閲覧室に一つだけ残った机に向かい、椅子に座ってイヤホンで音楽を聴いている。

彩花が入ってくる。沙織はそれに気付かない。彩花は沈んだ感じで入ってくるが、沙織の前では快活に振る舞う。その様子が観客にはありありと見える。

沙織 （彩花に気付いて）ああ。（とイヤホンを外す）

彩花 待たせてごめんね。二者面談がのびちゃって。

沙織 別にいいよ。ちよつとさみしいけど、涼しいから。

彩花 もうすぐ取り壊しで、誰も使っていないからね。じゃ、今日も古文のワークからしようか。やってみた？

沙織 一人じゃできないよ。

彩花 やってみなけりや。沙織のためにやってるんだから。

まず、読もうか。「いでやこの世に生まれては、願わしかるべきことこそ多かんめれ」読んでみて。

沙織 「いでや、この世に生まれては、願は|しかるべきことこそ多かめれ」

彩花 「願わ|し」ね。それから「多かん|めれ」

沙織 「多かめれ」って書いてある。

彩花 うん、書いてあるけど、撥音便が表記されてないだけで、読むときは「ン」を入れて読むの。

沙織 なにそれ。書いてないのに読むの？ わけ分かんね。

彩花 わけは、説明できるけど、今はとりあえず読めればいいから。

沙織 あーあ、わけ分かんないことばっかだなー。彩花はいいよなー。勉強できて。私、さっぱりだよ。

彩花 私のことはいいから。沙織の進級がかかっているんだからね。二学期の成績、少しは良くしないと、進級は難しいって言われているんでしょう。あなたがやる気を出してくれなきゃしょうがないじゃない。

沙織 分からないものは分からないんだから。一年生より分からないぞ、きつと。

彩花 じゃあ一年生になったら。

沙織 あんたには私みたいな子の苦労は分かんないよ。

彩花 苦労してるんだ。

沙織 私なんか、目付けられてるから何したってだめなの。何でも注意されるんだから。スカートが短いとか髪の毛が赤いとか目つきが悪いとか。目つきなんてどうしろっていうの。生まれつきなんだから。整形しろってか。そんなんだから、何か考えろって言われても、あれもこれもごちゃごちゃで、何から考えたらいいいのか分かんない。

彩花 私、沙織の気持ちも分かる。でもそれって、勉強とは別でしょ。

沙織 私の世話なんか頼まれて、迷惑だよ。ほんと担任も何考えてるんだろ。彩花の勉強時間とつちやうだけなのにな。

彩花 私はいいよ。先生だってほんとに沙織のこと心配して考えてくれたんでしょ。私ができることは手伝うよ。

沙織 松田かー、あんな奴の授業聞いてらんない。声聞こえるだけで気持ち悪くなる。

彩花 やめてよ。勉強しよう。

沙織 あーあ。こんなこと覚えて何になるの？ 何の役に立つの？ もう夏休みなんだろう？ なんでみんな講習なんて平気で受けてるんだ？

彩花 いいから読んで。

沙織 みかどのごいは、

彩花 みくらい。

沙織 いともかしこし。竹のそのふのす…、

彩花 すえばまで。

沙織 人間のしゅならぬぞ、

彩花 たね。

沙織 人間の種ー？ 植物じゃねーだろ、人間は。

等々、読みと間違いの訂正が延々と続く。その後方に人影。

緑 何してるの。

沙織 おお！ びっくりしたー。

彩花 緑さん！ 松田先生に言われて二人で勉強してるの。ここなら他の人が来ないからって。

緑 へえ、そうなの。まあ、図書館だから、勉強するのはかまわないけど。

沙織 緑、図書委員は新しい図書館に行けよ。ここはもう壊すんだろ。図書館じゃなくて、今は物置。それとも粗大ゴミ置き場か。

緑 まだ図書館よ。

沙織 もう何もねーだろ、古い机と椅子だけ残してみんな運んじやって。どこに本がある？

緑
あるよ。

緑、後方のカードケースの中から一冊の本を取り出しってくる。

沙織
何だそれ？

彩花
全部運んだんじゃないかったの？

沙織
盗ったのか？

緑
これは私が帯出中の本なの。借りてるの。この本がここに置いてほしいって言うてるから置いてあげてるの。

沙織
はあ？

彩花
分かったわ。じゃあそっちの方で読んでくれる？

緑
ここはいい図書館だわ…。

彩花
ちよつと暗いけどね。昼でも電灯ついてるのに、窓の側でないと目悪くなりそう。

緑 このくらいの明るさの方が「雰囲気」があっていいでしょ。

沙織 雰囲気？ 図書館はカラオケ店じゃないんだよ。

緑 図書館は知識の宝庫。本を読むのは、知識の大海に船出して冒険の旅に出るようなものなの。

沙織 頭、だいじょうぶか？

緑 このカードケースの中に、一冊ごとのカードが入っていて、誰かが探してくれるのを待っていた。でも今は空っぽ。(引き出しを外して見せる)
あなたの頭と同じ。

沙織 けんか売ってんの？

緑 けんか売ってるのはそっちでしょう。

彩花 やめてよ二人とも。

緑 本の世界に旅立って冒険しない人は、何か大切なものが欠落してしまうのよ。

緑、二人を尻目に下手に行き、椅子に座って本を読み始めようとする。

緑
ああそうだ、新図書館の書架整理があったんだ。段ボールから出して、分類ごとに書架に並べるの。大沼先生に言われてたんだ。

緑、本をカードケースの中に置いて、そそくさと出て行く。

沙織
大沼先生って誰だっけ？

彩花
図書館の司書の先生よ。

沙織
あー図書館の引っ越しの時にいろいろ説明してた人。

沙織、立ってカードケースの所に行き、緑の本を持って来る。

彩花
何すんの？

沙織
どんな本かと思ってさ。

彩花
人の本、勝手に見たらだめでしょ。

沙織

もともと図書館の本なんだからかまわねーよ。(パラパラと頁をめくって) あ、挿絵ある。狼か、これ。怖いなー。(と驚かすように彩花に見せる)

沙織、本のポケットから貸出カードを取り出し、読む。

沙織

一年五組吉田緑、一年二組佐藤俊一、吉田緑、佐藤俊一…、なんだこの貸出票、去年から同じ名前ばかり並んでる。緑と交代で借りてるぞ、この男。

彩花

いいから。

彩花、沙織から本を取り上げて元の場所に返す。

彩花

さあ、続けましょう。

S E、蟬の声 F I 次第に高まる(複数種類の蟬が多数鳴いている)
音楽かぶさって F I
溶暗

第2場

彩花の自宅前

S E、蟬の声 F O 音楽、次の場面台詞開始と同時に F O
前景溶明

前景に下手より母親と彩花が、加奈子（彩花の姉）の乗った車椅子を押して出てくる。上手よりデイサービス施設の職員登場して挨拶。彩花を引き取る。

母
じゃあよろしくお願いします。いつてらっしゃい。（荷物を手渡す）

加奈子が何か言うが、機能障害のためにうまく発音できず、聞き取れない。
「いつてきます」と言ったのだろう。加奈子、職員に押されて去る。

彩花
エレベーター付きのワゴン車、車椅子のまま乗り降りできて、いいね。

S E ワゴン車の発車音

彩花
お姉ちゃん泊まりだと、なんかホッとするね。お母さんも少し疲れてるみたいだから休んで。

母
彩花も勉強大変なのに手伝ってくれて、ありがとう。

彩花

施設の人は扱いが慣れてるよね。お姉ちゃんも家にいるより施設に泊まった方がいいんじゃない？ お風呂にも入れるし。

母

そうねえ、あそこに馴染んでくれて良かった。養護学校の寮にいたときは家に帰りがたってねえ。誰だって自分の家が一番いいものね。

彩花

おかあさんがいるからでしょ。

母

私が見られるうちはいいけどね。まあ、あの子も長生きは出来ないって言われているから、最後までみてあげられるでしょ。

彩花

お姉ちゃん、みんなに世話されて意外に長生きしたりして。

母

そうかしら？ 大丈夫だよ、彩花には面倒かけないから。

彩花

別にそんな、そんな心配してないよ。

母

そう。本当に気にしないでいいんだよ。母さんがやるから。彩花は彩花のやりたいうように生きてくれれば。加奈子の分もね。

彩花

そんなこと言われても…。

母

さあ、洗濯しよう。

彩花

ああ、私やるよ。

母親去る。彩花、少し遅れて去る。

激しい音楽（ロック）C I

溶暗

背景に浮かび上がるギタリスト

第3場

翌日 旧図書館

溶明（背景暗くなる）

音楽 F O、蟬の声 F I

倚子に座ってイヤホンを着けギターを弾いている沙織。アンプが無いので、音は出ない。

彩花入ってくる。

彩花

（沙織の様子を見とがめて）講習どうしたの？ 三時間目いなかったじゃない。
：ここでギター弾いてたのね。

沙織

（イヤホンを外して）文化祭でやるんだよ、バンド。

彩花

そう。でも講習サボってやること？ 自分の立場分かってる？

沙織

どうせまとめのテストなんかできっこないんだから。それよりこつちを練習したいとやばいんだよ。なのでー、今日早めに切り上げてもらいたいんだけど。仲間、待ってるから。

彩花

今日、数学三ページやる予定だったでしょう…。

沙織

嫌いなんだよ数学。うちら、かけ算割り算まででいいんだよ。なんだよパーミュテーションって。きやりーぴやむぴやむかよ。…言えねえ。

彩花

きやりーぱみゅぱみゅ。

沙織

びみよー。

彩花

ね、やればできるのよ！

沙織

いや、それはどうかな…

彩花 私だって勉強好きじゃないよ。勉強しなくていいんだったら、踊りたい。

沙織 踊る？

彩花 バレエ。習ってたから。

沙織 バレエ、踊れるんだ。踊ってみせて。

彩花 だめ。中学二年まででやめたから忘れた。

沙織 あのいろいろ形あるじゃん、あれでいいから。

彩花 ポジション？

沙織 かな？ それでいいから。

彩花、五つのポジションをしてみせる。

沙織 かつこいいー！

彩花、少し踊ってみる。沙織見つめている。

彩花 だめ、やっぱ忘れてる。うまくできない。シューズもないし。

沙織 すごい。

彩花 すごくないよ全然。

沙織 教えて。

彩花 え？

沙織 勉強じゃなくてバレエ、私に教えて欲しい。

彩花 何、どうしたの？

沙織 勉強はするから。夏休みの間ずっと。気分転換になると思う。

彩花 夏休みずっと？ 急にやる気出したわね。

だったら：勉強の合間に少しならできるかな？

沙織 そう！　ここなら広いし、見てる人もいないからちょうどいいじゃん。

彩花 ほんとにやるの？

沙織 やる。

彩花 それじゃ、明日、バレエシューズ持って来るから。足のサイズは？　私のでいいかな？

沙織 さあ、勉強しよう。

二人 勉強している。
大沼、登場

大沼 こんにちは。

二人 こんにちは。

大沼 松田先生に聞いて、どんな様子か見に来たの。

彩花 こんな様子です。

大沼 まじめにやってるようね。

沙織 進級かかってますから。

大沼 (見回して) こんなにガラんとしちやって。

彩花 全校生徒で分担して運びましたからね。

沙織 重かったよね。

大沼 本って紙の塊だから意外に重いのだから、大きな段ボールに詰め過ぎると持てなくなっちゃう。みんなに手伝ってもらって、ありがたかったわ。

沙織 バイト代出してもらいたかったな。

大沼 全部運ぶのに何日かかったかしら？ これで業者に頼んだら大変だったね。

彩花 大沼先生は、この図書館に思い出があるんじゃないですか？

大沼 そうねえ、私この図書館に十年間いるの。生徒の時も入れたら十三年。生徒の頃

から、ここが好きだった。何十年も前の女学生がここを歩いて本を探したり、ここに坐って何か夢のようなことを想像していたりしたんだなーって思うと不思議な感じがしたの。

彩花 生徒の頃は図書委員だった？

大沼 (頷いて) そういう私も大人になって、あなたたちのような生徒に本を薦める立場になってしまった。でもここに坐って本を読んでいる姿は、そのまま昔の私の姿と重なって見えたわ。

沙織 私みたいに居残りで勉強させられることはなかったよね。

大沼 さあ、どうだったかな？

大沼、後方に行き、カードケースの引き出しをあける。

大沼 このカードケース。よく使ったなあ。今はもうコンピューターで管理しているから、お役ご免。捨てられちゃうのね。(緑の本の入っている引き出しに手をかける)

彩花 あ、先生…。

大沼 何？

彩花 実は、ここで勉強してるんですけど、その気分転換に、少し体動かしてもいいですか…。

大沼 ここで？

彩花 はい。

大沼 体操でもするの？

沙織 バレエ。

大沼 バレエ？

彩花 いえ、まねごとですけど、沙織さんが教えてほしいっていうので。

大沼 へえ、あなたが教えるの？

彩花 ええ、まあ。

大沼 いいわよ。生徒も来ない物置みたいになってるよりは、この図書館もうれしが
かもよ。ただ、古いから床踏み抜いてケガしないようにね。

二人 ありがとうございます。

大沼 それにしても、沙織さんがバレエねえ……。どうしてまたそんなことになったのか
しら？

沙織 私がバレエしたら、何かいけないんですか？

大沼 ううん、全然そんなことないわよ。ないけどちょっと想像できなかっただけ。

沙織 （想像すんなよ。）

大沼 え？

沙織 別に。

大沼 じゃあ、頑張ってるね。

第4場

二人返事する。大沼去る。顔を見合わせる二人。

音楽C I（クラシック）

溶暗

中央奥に緑が浮かび上がり、バレエのポーズのような仕草をくり返すが、できていない。やがて消える。

一週間後 旧図書館

机、奥に下げる。

音楽、プロセから舞台上に移って続く。

溶明

ポータブルCDから流れる音楽に合わせて踊っている彩花と沙織。

彩花が止めた後、自己流で続けている沙織。バレエらしきものになっている。見ている彩花。（二人、制服でなくとも良い。靴はバレエシューズ）

彩花
沙織すごいねえ！ もうこんなにできるようになった。やった。

沙織
（踊りながら）才能あるのかな、わたし。

彩花 もともと体が柔らかいのね。筋力もあるし。ポワントで立つ練習もできるんじゃないかしら。

沙織 （踊りながら）ポワント？

彩花 トウシューズでつま先立ちすること。

沙織 へえー。私バドミントンしてたから、足の筋力はそこそこあるんだろうなあ。

沙織、好きに踊り出す。何の知識もない素人が、しかし才能だけで自己表現している、という感じの踊り。彩花、驚いて見ている。

緑、入ってくる。

緑 踊るなー！（CDを止める）

驚く二人。沙織、踊るのを止める。

緑 図書館で踊るな！

沙織 何だよ。

緑 図書館は踊る所じゃない。本を読んだり、学習するところなの。

彩花 ごめんなさい。でもここはもう図書館じゃないでしょ。取り壊しになるんだから。

緑 図書館だよ。

沙織 私の本があるってか。

沙織、奥のカードケースの所に行き、緑の本を探す。

緑 そこにはないよ。（本を持っている）

沙織 いつまで借りてるんだよ。（カードケースの引き出しを持って戻って来る）

緑 もちろん、いつかは返却するわ。でも、思い出すよすがが無くなれば、記憶している人がいなくなれば、何も残らず消えてしまう。みんな忘れてしまう。

沙織 何か忘れたくないことがあるのか。

沙織、カードケースの引き出しで遊ぶ（バネで棒を飛ばしたり）。

彩花　　なんでここに置いておくの？

緑　　これはね、あの人と借りた本。

沙織　　あの人？

緑　　彼と代わる代わる同じ本を借りて、葉に交換日記のようなものを書いて挟んでやりとりしていたの。でも、彼は転校して、この本だけが残った。あの人はまだ戻らない。思い出多いこの図書館ももう無くなる。この本の、この貸出票だけがあの想いの証……。だからここにあるのが自然なの。

彩花　　ええー、緑さんすてき！

沙織　　なんだつまんねえ。

緑　　何よ。

彩花　　それ恋愛小説？

緑、おもむろに本を開き、あらすじを話し出す。時々、挿絵を見せたりする。

緑

幼い女の子が森の中で狼に出会った。でも、「赤ずきん」じゃないのよ。狼は深い傷を負っていて、穴の中でじっとしていた。狼はこうやって傷を治すの。穴をのぞき込んだ女の子と目が合ってしまった。狼はそれでもじっとしていた。女の子は大人達に知らせることもせず、水や餌を持って来て狼に与えたの。狼は初めは警戒して口を付けなかったけれど、やがて娘に心を許して、食べるようになった。

沙織

ナウシカと王蟲^{オーム}だな。

緑

ある日、娘が穴に来てみると、狼はいなくなっていた。傷が治ったのね。

沙織

狼が転校した彼で、ナウシカがあんたっていうことか。

緑

ナウシカじゃないから！

沙織

何回も同じ本借りて読むなんて気持ち、分かんないな。もう話、覚えてたろう。

緑

とにかく、ここは図書館なんだから、本を読んで。踊るのは止めなさい。

彩花

でもね、緑さん、沙織は今、すごく踊りに集中しているの。こんなに短い間にこ

ここまで出来るようになるなんて、考えられないくらいにすごいことなの。もう、私の教えられることなんか無くなりそう。そうなったら、私の習っていた先生に見てもらおうかと思ってるの。

緑
へえ、そうなんだ。

沙織
踊るのが気持ちいいだけだよ。頭の中が空っぽになって。

緑
空っぽなのはいつものことじゃ…。

彩花
（沙織を制して）ああー、だから、認めてほしいの。沙織は踊ることとで冒険の旅に出ているんだと思うの。だから、図書館の尊厳は守ってると思うの。

沙織
図書館の尊厳？

緑
ふむ。気に入ったわ、その言葉。特別に認めてあげる。

彩花
ありがとう！ さあ、そろそろ勉強しましょう。これじゃあ、勉強の方が踊りの合間の気分転換になってるみたいね。

沙織
やるかー。踊ったらすすきりした。数学でもいけそうだ。

二人机に向かつて勉強を始める。
緑、少し離れたところで坐って本を読む。
S E 蟬が鳴いている。

智子が入ってくる。(ベースか何か担いでいても良い)

智子 沙織、さがしたよ。練習。

沙織 ああ、今行くから。

智子 こんなとこで何してんの？ ギターがいなきや始まんないんだから。

沙織 ごめんごめん。つい楽しくって。

智子 勉強が楽しいの？

沙織 彩花からバレエ習ってるんだ。

智子 へえ。うちらとは楽しくないの？

沙織 そんなこと言ってないでしょ。たださ、今までこんな夢中になったことなかったから。バドミントンやってたときよりおもしろい。

智子 バドミントン？ あんな顧問とじゃやってられないって部活止めたんじゃないの？
たっけ？

沙織 そうだけど。

智子 バドミントンの次はギターで、次は踊り？ ただ飽きっぽいだけじゃないの？
こっちは本気でやないと間に合わないんだからね。

沙織 分かってる。

智子 まだ二曲しか通してないんだから。

沙織 分かってるってば。

智子 文化祭まで一ヶ月、踊りは止めといてくれないかな。

沙織 バンドの練習にはちゃんと出る。迷惑は掛けないから。

智子

ふん。あとさ、練習スタジオ借りるお金、早く出してね。いる時間が短くたって、あんただけ安くするわけにいかないから。

沙織

分かった。

彩花、明日は朝から教えてもらっていいかな？

彩花

私はいいけど。八時までには来てるから。

沙織

じゃあ、八時に。

沙織、智子と去る。

緑

行っちゃったね。

みんな忘れてしまう。思い出すが無くなれば、記憶している人がいなくなれば、何も残らず消えてしまう。

彩花

目の前にそれがある限り、忘れようとしても忘れられないものがある。私も戻らなきゃ。

緑、見送る。

溶暗

第5場

音楽、C I 激しい曲調のクラシック

前中央だけに明かりが入る

明かりの中で踊る沙織

バレエというより、体の動くままに踊っている。何かから抜け出そうと、もがいているようにも見える。

前景溶暗

後方台上明るくなる。その中に、加奈子に乗せた車椅子を押し、背中に幼児の彩花を背負った母がいる。幸せそうである。

音楽、F O

彩花の内面世界 旧図書館

台上溶暗

前景、トップの中に彩花。独白。

独白の途中から不気味な音楽、F I

彩花

私が物心ついたとき、もう姉は今と同じでした。お姉ちゃん……。正直言って、友達が言うような「お姉ちゃん」ってどういふものか分かりません。

姉は特別支援学校の高等部を出た後、自宅療養となりました。介護はすべて私たち家族の手にかかってきました。

月に一回くらいは、民間のデイサービス施設に泊まってきましたが、あとはずっと

家に居ます。

姉は、デイサービスで施設に入るときしかお風呂に入りません。施設ではリフトに乗せて浴槽に入れますが、家庭では非力な私たちには大仕事だからです。

姉は自分ではほとんど動くことができません。寝返りさせてあげないと床ずれができてしまうので、夜も時々向きを変えてあげます。床ずれは、血は出なくて、肉にポツカリ穴が空いてしまうのです。何年も治りません。食事も、トイレも自分ではできません。トイレって言うっても、おしめをしているのでそれを交換するのです。私も時々やります。

独白の途中から、闇の中から、車椅子に乗った加奈子が現れ、進んでくる。

彩花

おしめを取り替えるのは臭くて嫌です。おしっこや便で重くなったおしめを丸めて捨て、姉のお尻をきれいに拭いて、新しいおしめをはかせます。

ついでに床ずれ、褥瘡って言うんです。その治療もします。お尻が汚れていると床ずれも治りません。

加奈子が何かを訴えるように手を動かしている。彩花からは見えない。

加奈子

加奈子なんか知らないって思っているんだろう？

彩花

（驚いて振り返り）何言ってるのよ。

加奈子 死んでしまえばいいと思っっているんだろう。

彩花 うるさいわね、何よ。

加奈子 彩花はいいよ。何でも買ってもらえて。何でも好きなことやらせてもらえて。

普通に学校に行って友達作って。何不自由ない一生じゃない。

私はどう？ 私はどうして何も出来ないの？

（近づく）私の世話なんて、母さんに言われて嫌々やっているんだろう。

彩花 あんたの、うんちの始末してるのよ、私！

加奈子が車椅子から立ち上がる。

加奈子 私を見るその目。自分の時間、自分の楽しみを取り上げている私への、憎しみに

充ちた目。心の底で私の死を願っている。

彩花 何もできないくせに！ 私たちにさんざん世話させて、自分は何もしないくせ

に！ 文句なんか言って！

彩花、加奈子を突き飛ばす。加奈子、よろめいて倒れ、車椅子に這い上がる。

彩花、加奈子の乗った車椅子を押す。

彩花

私に一生世話させるつもり！ 私の一生、台無しにする気なのね！
死にたいんだったら、さっさと死ねば！

ぐるぐるとすごい勢いで走り回る。急に止める。加奈子、前のめりに落ちる。
加奈子、悶えながら絶叫する。悪夢の世界。

彩花、車椅子を引いて後ずさりする。尻餅をつき、車椅子に寄りかかってそのま
ま気を失う。

短い暗転 その間に音楽F O

溶明

彩花の位置、姿勢はそのまま、車椅子がただの椅子に変わっている。
沙織が側にいる。

沙織

どうしたの？ 具合悪いの？

彩花

：ああ、夢だったんだ。

沙織

うなされてたよ。怖い夢？

彩花

怖い……。怖いのは自分なのよ。

沙織

え？

彩花

私の心の奥底で、自分でも気がつかないうちに恐ろしい考えが生まれて育っている。夢の中だとそれが、形になって、蓋が外れたみたいに噴き出してくるの。そんな夢を何回も見ていると、起きていてもそういう考えに取り憑かれてしまうようになるの。

沙織

ほんとに大丈夫か？ 座りなよ。何だ、その恐ろしい考えってのは？

彩花

：言いたくない。言ってもわかってもらえないから。

沙織

言ってみたら。

彩花

他人には絶対分らないよ。

沙織

他人って…。

バンドメンバー入ってくる。

智子

沙織、どうすんだよ。

沙織

ああ：

智子

ああじゃねーよ。本番までもう一週間しかないんだけど。

沙織

悪い。なんか、ギター弾く気分になれなくて。

智子

気分？ 気分で練習さばれたら困るんだよ。

彩花

ちよつと、何なの。

智子

あんたもさ、もう勉強はいいんだろう。

あんたが踊りなんか教えるから沙織が練習に来ないんだ。どうしてくれんだよ。

沙織

彩花は関係ねーよ。

彩花

バレエやってるのは朝だけでしょう？

沙織

面白くってさ、ずっとここで踊ってる時もあるんだ。

彩花

沙織：

智子 あ の さ 、 も う 他 校 の バ ン ド の ギ タ ー 借 り る こ と に し た か ら 。 沙 織 、 来 な く て い い わ 。

沙 織 … あ あ 。

智子 そ の か わ り さ 、 代 わ っ て も ら う 人 に お 礼 出 さ な い と い け な い ん だ け ど 、 沙 織 、 出 し て く れ る か な 。

沙 織 い く ら ？

智子 一 万 で い い よ 。

彩 花 ち ょ っ と 待 っ て 。 何 な の そ の お 金 ？

沙 織 わ か っ た 。 今 日 は 無 理 だ け ど 、 明 日 持 っ て 来 る 。

智子 ス タ ジ オ ま で 持 っ て 来 て く れ る か な 。 忙 し い か ら 。

沙 織 あ あ 。

バンドメンバー去る。

彩花 私も半分出すよ。私のせいなんだから。

沙織 関係ねーって言っただろう。

彩花 でも：

沙織 うるさいな！ そうやってよけいな気を遣うからおかしなこと考えるんだろ。

彩花 …。

沙織 人の心配より、自分の心配しろよ。誰だって自分のことしか考えないんだ。自分のことではいいいいんだ。あんなだってそうなんだろう？

うでないんだよ。もっと自由に踊ればいいんじゃないか。

彩花 そんなこと、あんたに言われたくない！

私：帰る。

彩花、退場。見送る沙織。

第6場

溶暗

背後の台上に照明。バンドが演奏中。

S E 強烈なロックの演奏。聴衆の歓声。

病院、処置室前の廊下

S E、C O 同時に背景のバンド消える。

前景溶明

母、下手の椅子に座っている。隣に無人の車椅子。膝の上に加奈子の荷物。

彩花上手より登場。

彩花

お母さん！ お姉ちゃんは？

母

内科の待合室にいたんだけど急に苦しんで、すぐに診てもらったんだけど、心臓止まって、何度も電気ショックしてくれたんだけど、脈もどらなくて。

今はその処置室にいるの。お父さんも中にいる。

彩花、処置室の方へ行きかける。

母

今は息してるみたいに見えるけど、人工心肺で動かしているだけなんだって。

彩花 え、どういうこと？

母 もう、自分の力では息していないの。

彩花 …。

母 家族の同意があれば外すんですって。

彩花 …外したらどうなるの？

母 …。

彩花 …私たちが決めるの、それ？

母 お医者さんの立場じゃ外せないでしょ。それにいつまでこうしておくわけにも…。

彩花 …もう、死んでるってことなんだよね？

母 そう。

彩花 も、外すの、いいでしょう？

彩花
：（頷く）。

彩花、母の横に座る。

母
お葬式出さなきゃね。お父さん、職場の方には、弔電とか花とか香奠とか一切い

りません、て言うからって。会社の人たちも、うちに障害児がいるってほとんど知らないから。

彩花は明日から学校休んでね、忌引きで休めるでしょ。さっき電話で松田先生にお聞きしたから。

彩花
うん。

お姉ちゃん、いなくなっちゃうんだ。

もう世話することないんだね。

母
けさ、ご飯食べさせて、病院へ連れて来たのが最後だった…。

彩花
私は、不思議に落ち着いていて、涙は出てきませんでした。

姉の死に泣かないでいる自分を、当然だと思っている自分がいました。

前景、彩花を残して溶暗

溶暗

第7場

文化祭後の旧図書館

S E ヒグラシの声

溶明

沙織、大沼、緑の順に古新聞の束を持って入ってくる。各自、下手奥に置く。緑は大変そうで、大沼が手伝う。

緑 (倚子に座って) 文化祭終わったばかりなのに英語のテストだって。「祭りの

後」って気分浸ってる間もないわね。

そういえば、智子たちのバンド、評判良かったよ。

沙織 そう。

緑 ギターがすごく上手かったんだって。

沙織 ふん。

沙織にメール着信

沙織 彩花、今からここに来るって。

緑
今から？

大沼
あなたが踊りたいって誘ったんでしょ？

沙織
学校始まって、放課後しか踊る時間ないから。

緑
彩花、文化祭見られなくて残念だったね。

大沼
お姉さん亡くなったからねえ。

緑
お姉さんいたんですね。

大沼
そう、なんでもお姉さんは生まれたときから重い障害があって、ずっと自宅で世話していたらしいの。心臓にも障害があって、ほんとに急になんだって。

緑
そういうこと、一度も聞いたことないですね。

大沼
どうしてもね、身内に障害者がいるって言いにくいんじゃない。それに彩花さんの場合は「きょうだい」問題があるからね。

沙織

きょうだいもんだいって？

大沼

障害者自身の生き方はみんな考えるけど、その家族の生き方はあまりかえりみられてなくて、特に、親子の関係じゃなくて、障害者と同じ世代のきょうだいの生き方が、最近やつと考えられるようになったの。

緑

親はいずれ子供より先にいなくなるけど、きょうだいはその後もずっといっしょに生きていかなければならないってことですな。

大沼

でも、きょうだいに親の代わりは出来ないでしょう。

沙織

：そうか。

先生、お願いがあるんですけど。

大沼

何？

沙織

緑も来てくれるかな。

緑

おお、悪巧み！

沙織

ちげーよ。

緑

手伝うよ。

三人去る。

S E ヒグラシの声。

彩花、入ってくる。

しばし座っている。

沙織、車椅子に乗って入ってくる。

彩花、それを見て一瞬緊張する。

沙織

ああ、別にケガしたわけじゃないから。(と立ってみせる)

保健室から古い方借りてきた。ずっと乗ってきたんだけど、やっぱり段差のあるところは一人居や無理だな。

：彩花、こないださ、悪かったよ。

彩花

ううん。

沙織

だけどさ、言ってくれないとわからないんだよ。何で悩んでるんだか。

彩花

ごめん。

沙織

お姉さんのことだろ？

彩花

：うん。

沙織

彩花がお姉さんのことでそんな悩んでるなんて知らなかった。あんたいつもちゃんとしてて、りっぱだったから。

彩花

違うよ。いつも嫌だったんだ、こんな、自分の中に嫌な心が溜まっているのが怖かったんだ。

小学校の時から、家に友達呼ぶの嫌だった。お姉ちゃんがいたから。自分が呼ばれても、他の人を呼べないんだったら、友達にならない方が楽だと思って、一人でいることが多かった。

はつきり謝っていたら救われたのかな？ 聞いてみれば良かったのかな？ 「お姉ちゃん、私のこと嫌い？」 「私ってひどい妹？」 って。でももう聞くこともできない。

沙織

そんな風に考えるのよしなよ。

彩花

私、正直言っただけとしてるのよ。お姉ちゃんが死んで、解放されたみたいにな：

沙織

彩花、やめなつて。

彩花

お母さんは、お姉ちゃんがあんなんで生まれたときどうだったんだろうって思う。きつとすごい責任感じて、もしかしたら自分のせいじゃないかって自分を責めていたんじゃないかって。一生懸命世話するのは、お姉ちゃんのためって言うより、自分が許されたい気持ちからじゃないかって。

沙織

違うよ。そんなんじゃない。

彩花

分かってる。分かってるの。だけどなんで私こんな風に考えちゃうんだろう。きつと自分も許されたいって思ってるんだろう。

沙織

そんなに自分を責めるなよ。

お姉さんが障害者だったことも、彩花がその妹に生まれて、そうやって悩んでいることも、彩花のせいじゃないだろう。彩花がこんなに悩んでるって事は、もうそれだけで十分なことだよ。許すとか許されないとかって問題じゃない。

彩花

でも、お姉ちゃんの一生って何だったんだろうって思うの。生きていてどうだったんだろうって。幸せだったんだろうか。

沙織が車椅子を持って来る。車椅子に乗って、彩花に強い口調で押すように言う。

しぶしぶ押し始める彩花。

沙織はあしろこうしろと命令する。彩花は嫌になる。

彩花

：もう、いいでしょう。

沙織

ねえ、お姉さんは何も言わなかったんでしょう？

彩花

：黙って乗ってた。

沙織

あなたのことが好きだったんだよ。

彩花

：ええ？

沙織

乗ってみれば分かるよ。

沙織、彩花を車椅子に乗せる。

途中から音楽、F I

沙織

（体を低くして）お姉さんはこんな高さから見てたんだよ。

彩花

：子どもの頃、乗ったことある。病院だったかな、学校だったかな。

向こうにお姉ちゃんがいて：

沙織

いて？

彩花

：笑って、私をみてた。

沙織

そう。

しばらく旧図書館の中を押し続ける。止まったり進んだり、静かに踊るように……。緑も見ている。その中を、あの日を思い出すように巡っていく。
彩花、泣き出す。

沙織

：ね、わかるでしょう？ 安心してまかせてたんだよ、彩花に。
お姉さんだって、生きているのがうれしかったに決まってるじゃない。

彩花、号泣する。

音楽 F O

大沼、緑、途中から見ていたが、中に入ってくる。

緑

おかえりなさい。ようこそ私たちの図書館へ。

沙織

空っぽだけどな（笑）。

緑

空っぽじゃないよ。

緑、例の本を取り出す。

大沼

あら、その本は？

緑

すみません。事情はあとで説明します。とりあえず、読ませていただきます。

緑、本の内容の続きを語る。

語りの最後にS E、狼の吠え声がかすかに聞こえる。

緑

娘は成長して王子様と結婚し、娘が生まれた。王子が即位して王となり、かつての娘は王妃、その娘は王女となりました。

突然、クーデターが起き、王は殺され、王妃は赤児の王女を連れて逃げる。

森の穴に隠れた二人を反乱軍が見つける。そこに一匹の狼が現れ、兵士達を追い払ってくれる。それはかつて王妃が助けた狼だったのだ。狼はかつて助けられたことを忘れず、恩返しをしたのだった。こうして二人は助かり、王妃は反乱軍を鎮圧した將軍の妻になり、將軍が王となる。

大沼

その本、そんな話だったかしら？

緑

王女は勇敢な女として成長し、馬に乗って狩りをするようになった。

王妃は年をとり、息を引き取るときがやってきた。ある日、宮殿に一匹の老いた狼が現れ、よろよと王妃に近づいてくる。それを見た王女は弓に矢をつがえ、狼を射ようとする。王妃はそれを止めて言う。「待ちなさい。あれはお前が赤児の時、私たちを守ってくれた狼だよ。」王女は弓を下ろし、まじまじと狼を見る。狼と王妃はしばらく見つめ合っていたが、やがて王妃が息を引き取ると、狼は悲しげな遠吠えをして去ってゆく。

彩花

不思議な話ね。

沙織

彼が老いた狼で緑が王妃か？

緑

そんなことしか感じないの？

（椅子に座って）私がおばあちゃんになって、息を引き取る間際に孫に伝えるの、おばあちゃんの初恋の思い出を。孫娘はこの本と貸出票を手にして、六十年前の恋心を想像するでしょう。そうして、孫娘が成長して、年老いて、またその孫に伝えてくれたら、私の恋は百年も二百年も思い起こされていくんだわ。

彩花 ロマンチックね。

緑 このお話は、「記憶」がテーマなの。記憶の継承と言ってもいいわね。

沙織 記憶のけいしょう？

緑 あなたが単位を落とすのはあなたの経験よね。

沙織 なんだと。

緑 単位を落とした痛みと後悔の気持ちを、実感をもって受け継ぐ人がいるってこと。

沙織 落とさねーよ！

緑 悲しいこと嬉しいこと、悔しいこと許せないこと、どんなに個人的な体験でも、

私たちは理解することができる。

彩花の、お姉さんに対する思いも、今私たちが受け継いだの。

大沼 一人ひとりの記憶は、こうやってみんなのものになるのね。

緑 そうです。

記憶の大海原が人間の世界なの。過去は記憶の中にあって、しかも現在に生きて
いるの、でも未来も同じように現在にあるの。

沙織

未来はないだろ。

緑

私の知らない記憶が私を支えている。私は空っぽじゃなくて、たくさんの、本当
にたくさんの記憶でいっぱいだ。これから生きていくって事は、未来の記憶を思
い出すことなのよ。

彩花

「未来の記憶を思い出す」？

緑

さあ、思い出して。お姉さんが、彩花に望んでいたことを。

彩花

ええ？

ポータブルCDから音楽（明るいクラシック）

沙織の踊り。

沙織

踊って！ お姉さんのために、彩花のために、私たちのために！

彩花の踊り。彩花の踊りはこれまでと違ってコンテンプラリーダンスのように自

緑

由で生き生きとしている。

彩花、すごい！

大沼

あなたがた若い女子高生は未来の可能性に溢れている。大人はそれを応援する。がんばれ。生きろ。輝け。その姿を、大人は激しい共感を持って見つめるだろう。

沙織と彩花、最後に一緒に踊り、曲が終わるとともにポーズ。

幕